

たより『美紗の会』
ニュース
第49号

第49号

平成16年12月15日
発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子

十九の夢 そして懸された「夢」物語

川崎 隆章

僕。ひと文字の偏りと旁りを、
なにが、切り結んでいるのか。
眼で聴き耳で覗いたばかりの幻を
反芻しながら、ヒトノユメと眩
して夜更けの路を歩いた。ひと
洋館が、いまは静まりかえつて
いるさまを、想い描いて、雨
なかを歩きだした。横殴りの
雨! 白から新宿までの行脚。
頬を刺すその冷たさが、心地よ
かつた。

(タクシーを止める? よせ
よ、不粋な冗談は。終電に乗り
遅れ、ようやく迷子になれた。
眼で聴き耳で覗いた至福を、享受
しないでどうする? たまひとも文
字、ただ僕。「夢」ではないのだ。
「夢」でも、じつはないのだ。
なんとしたかなみ迷惑。だから

ミカドの都の浮島の方へ。出合ったのは、媚とは金輪際無縁の、傍だった。闇に舞り、しかも纏り込枚の布があつて、しかも纏り込まれた柄は容易に、見晴らかすことができない。その明瞭な見えがたきこそ、祝福に備するはず。下品を味じていない。つまり救済を、拒絶している。言葉といふよりは声、声というよりは叫び。ただひたすら、傍に、届くうとして。馬場を過ぎ、大久保も過ぎて宿新は近い。言偏ではなく口偏、もう一文字。唇のむこうに隠された喉の砂漠に咲く紅い涙。ヒトノユ

雨が去り朝雲には青空にばづか
りと白い雲が浮かんだ。
神無月の二十四日もそうだった。
三井寺金堂で行われた智証大師入唐求法一五〇九年記念大會の際は、武藏順九氏の除幕式を思い出す。ローマ在住の友人で、ある作家武蔵氏は数年前から世界平和祈願の為世界各国で大石のモニュメント「風の環」を献納している。
来年はアジアにも新しい風を起す予感の聖地インド、ブッダガヤに設置するにあたり大津・三井寺でお披露目除幕式を予定していたが金堂の屋根が一部飛ぶほどに今から台風が吹き荒れ危険が危ぶまれた。
しかし金堂側の「風の環」は少しも揺るがず翌日は青空が輝くばかりに広がる中で真っ白いモニメントは旅中に除幕された。

露の世ながらありながら

西松布味

落書 by Masa

り、見えないかたちにも心を
ませていつか見えてくると
に独自の美を極めてきた。
美紗の会では弟子がコンビ
組んで公演に取り組み登表
ことがある。

そんな時にしばし相手を気兼
ね裕裕をきたしてしまった。
邦楽は言うに言われぬ微妙な
心のニュアンスが必要なのだが
それを培うには一生懸命努力
と優しさと……と統合して何だ
気が入らってしまうが日々の生
活の中で、「優い人の世だから
そなりながら」と世界のニュアン
スにも自然の音示や人々の言葉
から古味を繰り返し、耳を澄ませ
心を忘れずにはじめらしてゆきま
と思う。

メを孕んだ。ユメノヒトがいて、搔く弦からは現をうながす声が生まる。搔いた罰のためにその声は意味の手前で現を踏み抜き、深夜の雨驟に打たれ。酔客もまた、遙に踏みぬる。光榮を得た。だから歩いた。唉くそばか。ら搔き消される、わいかな花のために。裂くそばから離われてしまふ、舟のために。また陵辱に、策のない、傍のため。葉かなか歯かなか刃かなか波が叶かなか。雨となつて泣りやまないのはか。諭いて泣いた。言ひ訳が嫌い、P.T.A.が嫌い、二ジンジンが嫌い。偽の浮島で朝までビールの海を泳いだ。岸は、なかつた。

しよう”というものでした。想像によつても、その手のかなりかたが違つ。慎重に探し当たる題材をサツと卒意のワンショットで撮りあげた一見スナップ風の力作。曲をイメージとして焼き上げられた陶芸作品に浮かび上がる神妙な絵柄だけを写真撮影し、それを引いて日本的心象風景をスクリーン全面に浮かび上がらせたもの。日本画の伝統的意匠をもとに新たに仕立てる文字(フォント)を起こしてそれを印像のコラボレーション。CCG技術で描かれた雨に濡れて僕く流れゆく詩。全て現実の映像で描かれた心の桃源郷。忘れ去られ

の海に睡った一曲によつて、十九
世纪の存在が活かされたたゞえ
も思つ。それは、たゞえは
泣く泣く船に乗れなかつた人々
の歴史であり、また食い扶持の
為に苦界に身を挺することで他
生を支えた遊女たちの歴史を思
わせるようだ。大きな歴
史とのつながりを思つてしまつ
ます。さて、その曲とは何であつ
た：それはもうしばらくの間、
伏せておきましょ。

二つ目の事です。「権利関係」
についての事です。全ての音樂
には作者がいて、著作権が存在
することは皆様に存じと思いま
す。「権」を制作した時、最も大

「ユアンスがうまく出ない」といふ事もあったのでしよう。そうして辿り着いたタイトルは「夢」。
「うまい」誰にもつけようがない独創的なものでした。
この語の使い方としてもギリギリの際。「古典芸能の前衛」という場を表明するものとして「うつけのもの」となりました。
しかし、ここで「三つの孤独」
「というタイトルは蔭にかくれました」。ただ、このCDの企画そのものは「三つの孤独」というイメージは生きているのです。
今回の「ニュアンスの会」では、音と光と言葉による「つか離れずの世界」がズラリとな

海上で一〇〇八ヘクトパスカルの並の低気圧になつてひと仕事終えたのこと。

布咏師匠は、その後、アーチャーと労つてくださいました。それは単に労うというよりは、互いに「あの晚感じた狂おしい美しさ」を確認しあつてゐる様子であり、また恋人の逢瀬のような会合であつたとのこと。

作品の一つ一つについては、報告者の役目とは知りつつ、紙上での解説を避けました。せよとも、布咏師匠から直接話を伺つてください。話をするならやはり当事者が、一番なのです

り、見えないかたちにも心をもませていつか見えてくるものに独自の美を極め得た。美紗の会では弟子がコンサート曲目を取り組み発表することもある。そんな時にしばし相手を気遣うと破綻をきたしてしまふ。邦楽は言うに言われぬ微妙な心のニュアンスが必要なのだがそれを培うには一生懸命努力したるだけではなく余裕と恵みと優しさと……と統く何ぞか気が減入ってしまうが日々の生活の中で、「偉い人の世だから」と世界のニュアンスをさりながら世界の音葉として自然の啓示や人間の心をして三昧の音に耳を澄ませながら稽古を繰り返し、他を思ひ心を忘れずに暮らしてゆきたいと思う。

の南約三五〇キロの海上をゆく
くりと北上し、九日には関東か
ら東海にかけての海岸に上陸す
ることが必至となつた。

十月八日、東京・自白の日立
俱楽部で開催された「第四回
ニアンスの会」は、まさに、
そんな風味の肉会は、まさに、
の開催でした。来場の皆様、
どしゃ降りの中、大変に御苦勞
様でした。「ニアンスの会」は
ジョン・ソルトさんの提唱で必
ず「場所そのものに意味や価値
がある場所を使う」ことになつ
ているのですが、今回の会場「日
立自白俱楽部」は、昭和初期の
建築の特徴を残す名建築でした
で、もとは皇室御用としてしつ
らえられたもの。素材、一つ一
つの結構、細部の意匠に至るま
で、実に風格と安らぎを感じさ
せるおおらかなものでした。

今回は、布咏師匠のCD「僕」
からの企画で、収録された十九
曲ひとつひとつに映像をつけて

なたか一緒に語りあいませんか。
実は、今回題材となつた C.D
が出来るまでに三つの大きな
『節目の物語』がありました。
まず、当初このC.Dは二十
曲入りで企画されていたもので
した。収録時間の関係でどうし
ても「一曲入らないことがわから
ない」と無理矢理二曲詰めてみた
のですが、なんだかメドレーのよ
うになつてしまつたので、師匠
に御願いして泣く泣く一曲
はずして頂きました。(つまり、
今は、映像を持たない「蔭の一曲」
があつたのです。咲かぬ花一輪、
この一輪の哀しき。今回のライ
ブはこの蔭の輪の存在を(まさ
きに)「一曲省かざるを得ないと
判断した」企画者に問い合わせして
くれたのです。その一輪の蔭が
なければC.Dは完成しませんで
した。また、今回のライブの「
九の夢」というやうしいイメージ
も生まれなかつたでしよう(=)

う気持ちもあつたのですが、それが以上に「この唄を作ったのはどういんなのか」と追う事は大変で興味深いことでした。もちろん、作者が実在の方なのか不詳な作品もあり、未だ追跡中というもののあります。そういうものの中で、そこから「歌は収録しないで、歌詞だけ」と言われた歌を、「だまし」という御縁があったのです。

三つの物語は「夢」、というタイトルに至るまでの物語。当初、このCDは「三つの孤児」というタイトルで進められる予定でした。おわかりでしょう。三味線。かずかずはなし。三味線です。寄り添って寄りあわせます。寄り添って寄りあわせます。

一本一本違う音色を持つ三本の糸が奏でるひとつ曲。布咲師匠はそれを英語に置き換えてタイトルにしようとしたのです。ところが、そこにソルヌーでさうしたかったから電文による物言いがつきません。

を得たのでしよう。なんだかこれも名裏方の伝説を聴くよつた。清々しい話ではありますねん。この発案品として綴じてCDをライブによって聞く。これはプロモーションのレベルを遙かに越えた「破格」に他なりません。この発案であるソルトさんは、この意気で感服です。作品を提供くださったアーチストの皆様方も、その心にも大拍手です。そして何よりも、プロデューサー以降、現場の方々が苦労も譲らず、現場の運営が苦労も譲らず、れなければなりません。

二十一時過ぎに終演。路上は河川の如くなり、風雨は益々大きくなりました。台風二十二号『マーベラス』は太平洋岸を中国心に各地に大雨を降らせ、翌日の午後、伊豆半島から湘南方面に上陸。全国で計二千三百九十六人を避難させたものとされました。この夜一番の大裏方はその後関東から北海道まで一気に

私は最後の挨拶で
「限ります」
傍い世の中だからこそ優しくして
ユーモアを忘れず大切に生きて
行きたいのです」と結んだ。
霜月十四日の「美紗の会秋の
つどい」にもそれを思った。

一九〇四年十月海上で発生した台風リビンの東方海上にて、正午と名付けられた。中心の気圧は九九八ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は十八メートルで、ゆきくりした速さで北西へ進み

やつてくるものと言葉に対する夜の風景があぶりだし、これからやつてくるものと言葉に対する夜の風景があぶりだし、これから

すから、葵子折一つで済む話か
いう方もいらっしゃると思うの
ですが、「夢」の制作にあたっては
作曲者を探してみて許諾を頂くこと
と、その唄の「もと」と
に触れたいと思ったのです。もし
らん垂利關係を窺ひざつぱり

が「ひとつのお優しさ」を作ったと言えるかもしれません。

きな難題の一つがこの点でした。小畠は明治にこの点で立派な二十年代に最も隆盛を誇ったジャンルであるため、著作権が有効な楽曲（つまり、作詞者が作曲者のいすれかが亡くなつてから五十年ものもの）が多いのです。もちろん、邦樂の世界

期限を越えたイメージのセッション

イメージのセッション
—「夢」十九夜物語

ヤツタ ハナ

★作り手の時空間

れる。その音源がCDに定着する。そのCDを聞いた創作者たちが、自分の心の内外にイメージの翼を広げていく。そのイメージを視覚的な手段で固定させる。この静止イメージが、オーディオアートディストが動画イメージに発展させる。このようなプロセスを経て、このイベントが生まれた。場所は日立目白クラブルディングというアンティークな洋館で、そこには、三島由紀夫が「美輪明宏館」が出てきそうなところだ。

布咏さんの唄は、江戸の世界でもあり、現代の男女の機微もあり、時代を超えた人間の感情だ。これを聞くと、日常生活では経験しない感覚が、失われた風景か、哀しくなつかしくおかしい、そんな気持ち。「夢」十九の物語には、はるかな記憶が閉じこめられている。

映像は、直接の動画作品もあるし、静止イメージから動画もある。メージは、虹らまされた映像もあり、カーラーもモノクロも、人間も植物も文字も登場する多彩なもの。これら作品が制作され上映されるまでのプロセスには、スペークする心の動きの交差があった。

多くの人たちによって、場面の情感をこめて唄われたこの唄は、平成のこの時代において、布咏さんによつて現実化される。ストーリーや匂い、切なさやいとしさやドギドギが具現化する。そのCDを聞いて布咏さんの遊び心と味わい、創作者たちの遊び心をつないだり一緒に遊んだりしながら時間軸を沿わせていくのが、ビデオアーティストの田村洋さん。まるで、

「嘘のかたまり」タバコの箱が燃え、焼け焦げて穴があき、次にその場面に進んでいくところか、嘘と誠と重なつていい男女の火色と焦げた茶色が、感情の強さを伝えている。

「吉三節分」節分に降るみぞれの画面に、植物の精密画。ラストでは乱れた髪の女の横顔をして耳がアツブしてくる。表情が見えない顔ゆえに、隠された意味は深い。

「薬蝶」タロットカードの人物の顔がぐるぐるになり、カードはぐしゃぐしゃになり、真ん中から割れ、くしゃくしゃからびんとなつて、カードに描かれた人

ジャムセッションだ。その場に居合わせて楽器で応答するのではないか。眼の心、唄い手の心と同じだ。唄の心、唄い手の心と動きが、布咏さんの身体を通して顕現され、それを創作者たちが自分の耳から心を通してさせた手から作品に向流し込む。田村さくらは、この静止画像から時空間を独立させて動きひとつも欠かさずする。すると、その作品が動き始めて、また布咏さんと語り始める。唄が創作者の心を動かす。創作者の作品が田村さんの音楽を刺激し、その画像がまた室音者の布咏さんの気持ちに添つていく。時空間を超えた緊張なジャムセッション。

物たちは運動し表情を変える。
翻弄されているように。運動と
はいたずらな様子の。
「この先」の字の中に女
の「一」字が含まれる。打ち上げ花火
の美しさ、桜の美しさに、男
と女の情感の高まりがシンクロ
ナイズしていく。

「一 声は」布咏さんの着物にも
染められたHOLONオリジナル
ルフォントが歌詞をアルニア
ベットで語っていく。折り紙み
が浮き彫りにされるのと、隠さ
れたもののがお隠れていくのは
ふれる月めぐら。EROSの語
ふれどもがる。

きの火花。
　今回は異種格闘技というより
は、聴覚と視覚の豪奢なタベス
トリ」だった。布咏さん世界を
いう縦糸が瀟洒で堅固な世界を
描いていて、横糸の映像作家た
ちは、それに対応してからんだり

離れたりねじれたりしながら、
楽しく遊んでいるようだ。織り出される文様も、百姓の編みあり複雑な模様もあり、百姓の間で示した
ニユアンスの会が開示したアートの可能性は、すばらしく広大だ。閉塞感や息苦しさを當

えでしまうこの時代こそ、四〇年などなんのその、大またに飛び越えてしまうアートの底辻をもつと試してみよ。その後もまた、その限界を押し広げる布咏さんとアートたちの仕事をたのしみにしている。

「橋姫」に寄せて

中村惠

田生命ホールに行く。水妖の会は、毎年1月10日㈯に開催される。主催による「馬場あき子」情念の世界「貴船の鬼・橋姫」を見るために。いや、そのところ創舞踏「橋姫」「恨みながら恋しや」と聞くために、西松布咏さんのが正確。歌人 馬場あき子さんの詞に西松布咏さんは曲をつけたと。しかも、唄・三味線は作曲者である西松布咏さん。これを見逃すわけにはいかない。

水妖の会は能の足禮子さん日本舞踊の藤間勘七孝さん、コントンボラリーダンスの前田和子さんが作っている会。「貴船の鬼・橋姫」は、半能・鉄輪を足禮子さんがシテとして演ずる前半と「貴船の鬼」についての馬場あき子さんのお話を、そして創作舞踏「橋姫」で女の心を表現したもので、馬場あき子さんが作詞したのに西松布咏さんが曲をつけている。「言ひて、えば、情言葉の世界が西松さんの曲、声・三味線によつて濃密な空間を創りあげていた。風の音の様な尺八がものがあわれを誘うもの、語られる物語は激しく、女の心は鬼の心を孕む。しかし、その心のどこかに女の心は残つていて、それが時に艶やかでもある。まさに「恨みながら、なおも恋しや」な感情を見事に表現していた。

「貴船の鬼」の物語の舞台は京都の貴船神社奥宮である。今でも貴船神社奥宮に行くと絵馬に呪いの文字が書かれているのが多くあるという。日本にもおも恋しや」な感情を見事に表現していた。

もともと鬼の住む場所ではなかった。『黄船』は、皇の母である玉依姫が浪速から黄船にのって淀川、鴨川を溯り、この地に現れた。五世紀の初め、神武天皇がこの現象に由来する。鬼が語られたるのは平安時代になつてからである。中将定平が鬼姫とよばれる姫君とおちた。しかし、それは結婚の件で、生贊の刑にされ、鬼王の餌食となる。鬼姫は縛の紐をちぎって定平に別れ際に渡す。その後、定平の叔母が女の子をひいていた。その子は定平の妻となり、未永く幸せに暮らした。この物語にあるように、貴船は、「われても末にあわん」とぞ思う。よくなつて二人の縁結びの神である。しかし、それが一方では、命がけの恋を祈念する者たちにとっては、その願いが断たれた時、その恨みや怒りをはらす場へと変貌したのである。能『鉄輪』に代表されるような丑の刻りが行なわれたり、自分の命を引き換へ人に呪い殺さうとする場所になつたのである。『鉄輪』の物語は、今のように闇開闢の浮淫性夫を捨てられた女が、夫の心を引きとめようと夜な夜な駆け馬街道を貴船の宮に通つていた。やがて託宣があり、鐵輪の足に蠟燭を灯し、それを頭に舟で運ぶ。更には顔と体に舟だつた男と後妻の女を殺すとするだけだが、夫だつと思つたものは、陰陽師。安部晴磨が折檻してゐるが、その仕事は、貴船の宿すところを守ることである。

くが、思いを果たす事ができなかつた。一方、橋姫の物語は、「平家物語」に登場する物語で、女は本懐を遂げ、浮気をした男と女、さらには親類縁者をも殺してしまつた。馬場さきに「橋姫」という愛称がついたといふのが、馬場さきの「橋姫」という悲惨な女面にある。夫の愛の裏切りに鬼となつた女の面である。激しい情念の炎のかげで、夫は「金銭輪」の絶望がある。夫と一緒に死んで夫と共に死むことはない運命を、自ら選んだ悲しみを抱きながら、背信に報いようとしている」とのこと。橋姫は貴船の娘になりながら、夫を呪い殺すとする瞬間にあって、なお愛する心の葛藤を全て包含しつつ表現している。私は出来れば定平でありたかった。この女の哀しさ、無念さ、怒り、苦しさといった内面の葛藤を矢張り評するのに堪能だ。ところが、この女の三昧論と咀嚼は、やはり異常気象かなと思ひます。私は出来れば定平でありたいと思いつつも、鬼になりつつある橋姫を強く抱きしめて鎮めてやりたいとも思つた。

編集後記

大久保朋子
今年も残り少くなりました
走というのにこの暖かさはどう
でしょう。秋の台風といい、
やはり異常気象かなと思います。
一月十四日のお
らい会い来て不^トと治りました
族中に移してやつと治りました
…皆様お風邪を引きませぬ
良いお年を